

【要旨】

社会システム研究科

東アジア専攻 2012m50003 辛文姫

本論文では、江戸時代に朝鮮から派遣された朝鮮通信使の衰退の理由を①萩藩による接待の限界②日朝外交意識の違い③対馬藩の既得権益という三つの観点から考察した。

第1章では、萩藩の通信使応接史料である「公儀人記録」を用いて通信使接待をめぐる藩と藩の対応を検討した。

まず萩藩と対馬藩との対応についてであるが、萩藩は、不必要な前例を残し、これからも同じように接待しなければならないことを恐れていると同時に、通信使接待において慢心も感じ取れるとも言えよう。これに対して対馬は、なるべく通信使の希望に答えることがよい接待だという積極的姿勢であった。できるかぎり新たな問題を生じさせたくないという原則から出ることのできない萩藩の限界も分かった。

次に萩藩と福岡藩を見ると、互いに下行の責任を押し付け合うのではなく、小倉藩の責任に転嫁することによって、長年にわたるお互いの通信使接待の負担を軽減しようと図ったといえる。両者の交渉を見ていくと、藩の負担を前提とした通信使接待の枠組み自体に両藩が疑問と反発を示していることを読み取ることができるのである。もはや通信使接待という幕府の命令に対する藩の「タテ」のつながりへの忠誠心が衰える一方で、藩と藩の間の「ヨコ」のつながりである共感と親近感が芽生えていたことによって、幕藩的な通信使接待のシステムの崩れが見えてくることが分かった。

さらに萩藩とその支藩である岩国藩を見ると、藩と藩の間の上下関係が通信使接待における領主間の意志伝達に障害を招来したとも言えよう。

第2章では、「公儀人記録」のほか『通航一覧』所収の記録や『江関筆談』を用いて日朝関係について検討してみた。

中国を中心とする伝統外交を守ろうとする朝鮮側と、東アジアの伝統から離れ、新しい外交システムを作ろうとする日本側の鮮明な違いが伺える。ここで注意すべきは、朝鮮の目的は、従来研究で指摘されたように日本より優位に立とうとしたというより、これまでの伝統を守って対等な関係を維持しようとしていたと思われることである。それに対して日本側は、中国を中心とした伝統外交から離れて、新しい外交秩序を作ろうとする一方で、朝鮮との外交においては他の諸国とは異なった対応を取るによって、関係を維持しようとする姿勢が伺える。また幕府は朝鮮に対してある程度妥協をしていることも伺える。そのことは従来の研究では朝鮮に対して反感を抱いていたという新井白石と通信使との問答を改めて分析することによっても分かる。ここでは白石の朝鮮に対する一定の配慮と、同じ儒学者としての尊敬が伺えることから、幕府の朝鮮への配慮がわかる。

また日本側が先例を重視する中央集権的官僚主義であったことがわかり、これに対して

朝鮮側は、礼に従うか、法に従うかを原則にしているにもかかわらず日本は原則がなく、只責任を回避しようとする官僚主義であることを嘆いて、日本のこのような態度を不愉快なことだと考えていたことがわかる。日本側も朝鮮側も通信使接待の成功のため努力していたにもかかわらず相互の不信が募っていったことは、ささいなことで通信使の都訓導であった崔天浣を殺害した鈴木博臧の事件からも分かる。殺人事件まで起こってしまうような深い不信感と緊張感があったのである。

第3章では対馬藩の儒学者であった雨森芳洲が書いた日朝外交の指針書『交隣提醒』を用いて、通信使接待と倭館経営の実態と彼の見解について検討した。

中世においては倭寇対策として当たり前のように思われていた朝鮮王朝の対馬藩（宗氏）の家臣に対する禄米支給が幕藩制国家では問題となり、また対馬藩にとって既得権であった経済意識と藩外の出身である芳洲の国家の視点からの政治意識が対立していることが分かる。さらに言えばこのような芳洲の態度はそれまで朝鮮と日本の間に立って利益を得ていた対馬藩（宗氏）の中世的な役割をある意味で否定する近世的外交観にもとづくものであるとも読み取れる。このように芳洲は従来の幕府の露骨に政治的な通信使への応接や、倭館における対馬藩の緩んだ慣行や自己中心的な法意識を批判しているが、そのことはそれが重なることによって日朝関係が行き詰っている状況を表している。

すなわち本稿では、長年に渡る外交使節である朝鮮通信使の衰退の原因は、序論で紹介した従来の研究で指摘されている幕府や藩の接待の負担という経済問題や日朝外交問題とは別に、幕府の権威が低下するとともに接待を受け持つ藩が自らの利害にしたがって行動するようになったこと、接待の回を重ねるたびに緊張感の緩みが生じたこと、国内における封建的主従関係が足かせとなり藩と藩の間の意志伝達が上手く出来ないシステムとなったことであった事実を指摘した。